

人格の対人的診断法の研究（5）

—— 対人行動の測定法について ——

戸 莉 正 人

（教育心理学研究室）

（平成3年10月8日受理）

I 対人行動の測定法（原法の場合）

1 対人行動測定の作業原理

Leary, et al. の人格の対人的診断法の第三の特色は、その徹底した経験的アプローチにある。この特色は、既報のように、^(文献6,7) 人格のレベルの決定や、人格の変数の分類に認められるのみならず、対人行動の測定そのものにも認められる。

彼らは、人格の対人的体系の作業原理として、9つの原理をあげているが、その中、人格研究の経験的原理としているのは、次の第八の作業原理である。

作業原理Ⅷ-① 対人行動の測定は、公共的で、検証可能な操作でなければならない。^(1, Pp. 45-47)

作業原理Ⅷ-② 諸変数は、操作的に定義可能でなければならない。^(1, Pp. 47-48)

作業原理Ⅷ-③ 人間性についてのわれわれの結論（予見）は、絶対的な事実としてではなく、蓋然的な陳述として提示しうるのみ。^(1, Pp. 48-49)

作業原理Ⅷ-②は、すでに対人的変数の決定のさいに触れた。⁽⁷⁾ 原理Ⅷ-③は、次報の診断法にかかわるものである。⁽⁸⁾ 本論にかかわるものは、Ⅷ-①の原理である。

この作業原理からすれば、人格の診断は、対人行動の経験的測定からすすむこと、対人行動の測定は、客観的手続によることが求められる。したがって、類型学の如き、上からの直感的診断ではなく、下からの経験的方法によるデータの蒐集からスタートすることを必要とする。

ところで、パーソナリティのデータは、人間の行動についてのコミュニケーションである。⁽⁵⁾ 本人自身か他者による記述である。この記述の信頼性や検証可能性は、確実なデータ記録の保存によって可能となる。

パーソナリティの個々の表現自体は、ユニークで、反復不能ではあるが、行動を分類する基本的な変数（単位）そのものは、その定義によって、一般的（普遍的）であり、くり返し生じるので、第三者による検証が可能である。^(1, Pp. 46-47)

2 対人行動の測定法

対人行動の測定にかかわる今一つの原理がある。

作業原理Ⅶ： 人格のすべてのレベルにおける対人行動の測定に、同一の変数体系を用いること。(1, P. 43)

人格の各レベルにおける対人行動の測定に、16種の対人的変数を用いることは、すでに触れている。(7) また、Leary, et al. の各レベル毎の代表的な測定法についても報告済みであるが、(6) 念の為に、ここに再録しておく。

① レベルⅠ行動の測定法

レベルⅠ-S：仲間の人びと、または、熟練したオブザーバーによるソシオメトリックな評定（行動観察の要約）。レベルⅠ-R：実際の社会的場面における個人の行動の、熟練したオブザーバーによる遂一的評定（直接の行動観察）。レベルⅠ-M：MMPIによる症候行動の評定（検査に対する反応を、臨床家に対する訴え、メッセージとして扱う）。その他に臨床用の2種の専門的方法がある。(1, P. 78)

② レベルⅡ行動の測定法

レベルⅡ-C：患者が、自己と他者についての見解をチェックした ICL（Interpersonal Check List）のスコア。Ⅱ-Di：診断面接の場で表現された言語的内容の、熟練した評定者による評定。Ⅱ-A：患者が誌した自叙伝の内容の、熟練した評定者による評定。Ⅱ-Ti：治療面接における言語的内容の、熟練した評定者による評定。(1, P. 78)

③ レベルⅢ（対人的象徴）の測定法

これには七種の方法がある。レベルⅢ-T：TATストーリー中の対人的テーマの、熟練した評定者による評定。Ⅲ-F：空想ストーリー中の対人的テーマの評定。Ⅲ-D：夢のプロトコール中の対人的テーマの評定。Ⅲ-M：前意識的行動を予見する MMPI の指標。その他、三種の投影法形式のテストへの反応の評定が利用される。これらの評定は、すべて、熟練した評定者によるものである。(1, P. 79)

④ レベルⅣ（表現されないもの）の測定法

a) 有意な《オMISSION》の測定法

レベルⅠ、Ⅱ、Ⅲ-Hero, Ⅲ-Otherの得点を検討し、一貫してオミットされている行動を発見する。これには、プロフィール（グラフ）の検討と、数学的方法とがある。後者によれば、レベルⅣデータを単一の《要約点》（力の作用点）によって診断格子の上に表わすことができる。レベルⅣオMISSION得点は、レベルⅠ～Ⅲまでの表現されたものの平均要約得点を計算し、全体（100）から減算すれば、得られる。(1, P. 175)

b) 有意な《回避》の測定法： 統計的方法：普通の人なら肯定し、表現するテーマを肯定せず、表現しない傾向の評価。抑圧のテスト：Iflund test による記憶における防衛（選択的忘却）を確かめる手続。知覚における防衛のテスト（知覚防衛の測定：閾下刺激の認知閾の測定による）。(1, Pp. 196-199)

⑤ レベルⅤ（価値）の測定法

質問紙法、チェックリスト、面接、自由連想法により、当人の価値観に関係する表現を選び出す。代表的方法としては、V-C：ICLによる理想の評定。V-Di：診断面接中に表現された患者の理想の、熟練した評定者による評定。V-Ti：治療面接中に表現された患者の理想の、熟練した評定者による評定の三種がある。(1, P. 204)

II 顕在的レベルの測定法の改訂

1 測定法の統一

Leary, et al. の原法によれば、各レベルのデータ測定法は、多様にある。しかも、原法のデータ測定法は、本来、臨床的目的のための測定法であり、余りに専門的、かつ複雑で、素人には近寄りやすい点が少ない。

筆者の対人的診断法研究の目的の一つは、病者や異常人格の診断という、せまい臨床分野から解放し、正常人（普通人）の人格の研究と理解に活用すること、さらに、専門家向きの研究目的を超えて、広く一般人の自己理解と他者理解に活用できるよう、簡略化、平易化することにある。

そこで、対人的診断法の普及化のために、データ測定法の統一による簡略化、平易化を試みた。⁽⁶⁾

レベルⅠ、Ⅱ、Ⅴの三つの顕在的レベルの測定には、筆者の「ICL 評定票（改訂版）」^(付表1)による測定を代表的な方法として統一した。レベルⅢについては、TATによる測定、レベルⅣについては、数学的方法による、有意な《オMISSION》得点の測定法を用いることにした。

2 ICL 評定票の改訂

① ICL 改訂の目的

筆者の ICL 改訂の目的は、単に日本改訂版の作成にあるのではない。原法の Interpersonal Adjective Check List, Form IV は、本来、臨床的目的のために作成されたものであり、その内容は、患者が実際に使用する言葉から成るものである。^(1, P. 458)

それに対して、筆者の対人的診断法改訂の目的は、正常人の人格の研究と理解に普及化することにあった。そこで、正常の大学生の見本集団について、改訂版の作成を試みてきた。

② ICL 改訂第 5 版 (Form 6) の作成

筆者の「ICL 日本版」作成の経過については、既報において、ある程度は報告している。⁽⁴⁾ 要約すれば、以下の通りである。

1958年、Leary, et al. の ICL (Form IV) の日本語版の作成以来、数次にわたり、改訂を重ねてきた。1970—73年にかけては、改訂第 4 版 (1970) を作成し、その因子的妥当性の吟味と項目分析とを行なった。

項目分析の方法としては、尺度内相関の検討と項目の通過率の検討とを行なった。項目分析の結果については、未報告であったので、ここに要約して報告する。その概略を示せば、Table 1 の如くである。

この結果にもとづき、改めて128項目の「ICL 評定票」(1980年版 改訂第 5 版, Form 5) を作成した。

③ 改訂第 6 版の作成

その後、項目の配列方法を改訂して、1981年版 (改訂第 6 版, Form 6) とした (付表 1)。16の変数を A～P の順に配列していた評定票を、オクタント得点の計算の便宜上、P～O の順

Table 1 ICL評定票の項目分析

Octant 1 : AP		Octant 5 : HI	
A : 1 人を指導できる \triangle	P : 1 考え深い \bigcirc	H : 1 自分を反省できる \bigcirc	I : 1 人に服従できる \bigcirc
2 勢力がある \bigcirc	2 優れている \triangle	2 良心的である \times	2 内気である \times
よくリーダーになる \bigcirc	賢明である \times	生まじめである \times	おとなしい \bigcirc
責任感が強い \times	向上心が強い \times	気が小さい \times	控え目である \bigcirc
3 ポス的である \bigcirc	3 野心が強い \bigcirc	3 自分を責めやすい \bigcirc	3 引込み思案である \bigcirc
支配欲が強い \bigcirc	完全を求める \times	自信がない \odot	気が弱い \bigcirc
官僚的である \times	威張っている \times	劣等感が強い \times	屈服しやすい \triangle
4 独裁的である \bigcirc	4 独断的である \times	4 罪悪感が強い \times	4 意気地がない \bigcirc
Octant 2 : BC		Octant 6 : JK	
B : 1 自尊心がある \bigcirc	C : 1 自分の始末ができる \triangle	J : 1 人を尊敬できる \bigcirc	K : 1 人を信頼できる \bigcirc
2 独立心がある \bigcirc	2 人に冷淡である \bigcirc	2 すなをである \triangle	2 よく人に相談する \bigcirc
自分を主張する \bigcirc	勝気である \times	感謝の念がある \bigcirc	忠告によく従う \bigcirc
大胆である \bigcirc	わがままである \times	忠実である \bigcirc	人を疑わない \bigcirc
3 自信が強い \bigcirc	3 競争心が強い \bigcirc	3 権威には弱い \times	3 自分の始末ができない \times
見栄っ張りである \times	打算的である \bigcirc	権威を崇拜する \bigcirc	人に頼りやすい \times
派手好きである \times	自己中心的である \bigcirc	めったに反抗しない \bigcirc	だまされやすい \bigcirc
4 高慢である \bigcirc	4 人を道具に利用する \bigcirc	4 卑屈である \times	4 人にすぎる \triangle
Octant 3 : DE		Octant 7 : LM	
D : 1 必要な時には厳格になれる \bigcirc	E : 1 人を批判できる \bigcirc	L : 1 人と協調できる \bigcirc	M : 1 人と仲よくできる(友好的) \bigcirc
2 厳しいが公平である \bigcirc	2 人を責めやすい \bigcirc	2 愛想がよい \bigcirc	2 気持が暖かい \bigcirc
正義感が強い \times	気が短かい \bigcirc	楽天的である \bigcirc	理解がある \bigcirc
秩序を重んじる \bigcirc	批評好きである \bigcirc	快活である \bigcirc	人と親しみやすい \bigcirc
3 口やかましい \bigcirc	3 口が悪い \bigcirc	3 人に同調しやすい \bigcirc	3 社会的である \bigcirc
手きびしい \bigcirc	意地悪である \times	自分の信念がない \times	開放的である \bigcirc
融通がきかぬ \times	攻撃的である \bigcirc	妥協しやすい \bigcirc	さびしがりやである \times
4 残酷である \bigcirc	4 無慈悲である \bigcirc	4 だれにでもよい顔をする \bigcirc	4 だれにでも好意をもつ \bigcirc
Octant 4 : FG		Octant 8 : NO	
F : 1 必要な時には抵抗できる \triangle	G : 1 むやみに人を信じない \bigcirc	N : 1 思いやりがある \bigcirc	O : 1 人の世話ができる \bigcirc
2 孤独がちである \times	2 すぐ気を悪くする \triangle	2 優しい \bigcirc	2 世話好きである \bigcirc
強情である \triangle	こだわりやすい \triangle	親切である \bigcirc	頼りになる(頼りにされる) \times
因習をきらう \times	うちとけない \times	同情心に富む \bigcirc	寛容である \bigcirc
3 不機嫌である \bigcirc	3 しつと深い \bigcirc	3 情にもろい \bigcirc	3 気前がいい \bigcirc
不平が多い \bigcirc	悲観的である \times	親切すぎる \bigcirc	献身的に人につくす \bigcirc
協調性がない \times	疑ぐり深い \times	人をかばいすぎる \bigcirc	寛大すぎる(甘い) \bigcirc
4 反抗的である \bigcirc	4 人を信じない(られない) \bigcirc	4 過度に情深い \bigcirc	4 人の世話をやきすぎる \bigcirc
\bigcirc ……適切な項目 (84項目)	\triangle ……変数間の移動を要するもの (3項目)		
\odot ……強度の変更を要するもの (1項目)	\times ……不適切な項目 (33項目)		
\triangle ……表現の変更を要するもの (7項目)			

に変更したのである。

回答用紙(付表2)も、当然、同様の順序に配列を変更した。その後、使用データを追加(II-S') : 他者との関係における自己、II-S(O) : 他者の自己像) して、1990年版とした。

なお、従来の「ICL性格評定票」を、1981年版より、「ICL評定票」に改称した。‘性格’なるタームへの疑義(異和感)からである。

3 ICL 採点法の改訂

① 原法の場合

Leary, et al. の「ICL」原版の採点法には、問題がある。彼らの「ICL」では、16の対人的変数を、それぞれ4段階スケールで表わしている (Table 1 と同じ形式)。ところが、実際の採点においては、それぞれのカテゴリーの中で、回答者がチェックした《ことばの数》を、粗点としている。(1, P. 457) すなわち、理論的適合性と経験的適合性 (通過率) の双方から、項目の強度を4段階に区別していながら、実際の採点においては、得点の重みづけをしていないのである。これは、誠に不可解といわざるを得ない。

② 筆者の改訂

筆者の ICL 改訂版では、理論的仮定と通過率とにより、項目の強度を4段階に分け、1点～4点までの得点の重みづけをしている (Table 2)。

4 ICL 改訂版の用途

① 用途の拡大

原法では、ICL は、自己評定、理想の評定、他者の評定、他者による評定のみを用いられている。それに対して、筆者は、ICL 評定票を、《重要な他者》による評定 (I-S)、自己評定 (II-S)、他者の評定 (II-O)、理想の評定 (V) の他に、特定の他者との関係における自己の評定 (II-S')、他者の自己評定 (II-S (O)) の2種を加え、合計6種の評定に利用している。(6, Pp. 43-44)

② 採点法

Leary, et al. の原法では、ICL の採点法は、128項目の中、〈当人がチェックした項目の数〉を得点としている。筆者は、128項目について、肯定、否定、不明の3種の判断を求め、項目の強度に応じて (S₁~S₄)、1点から4点までの重みづけ得点を与え、16の変数毎に集計する。1変数につき最高20点満点とした (cf. Table 2, 付表2)。

Table 2 項目の強度と重みづけ

強度	通過率	程度	重みづけ 得点	項目数
1	約90%(81~100%)	穏やか	1点	1
2	67%(51~80%)	適度	2点	3
3	33%(21~50%)	顕著	3点	3
4	10%(0~20%)	極端	4点	1

Ⅲ. 潜在的レベルの測定法の改訂

1 レベルⅢ象徴的表現の測定法

① 測定道具：TAT カード

Leary, et al. の原法では、対人的象徴 (象徴的レベルの対人行動) の測定に、TAT の他、空想や夢の記録など、6種の方法を推せんしている。しかし、空想や夢を経験しても、だれもが想起できるわけではない。筆者の R-S 次元についての研究によれば、夢を全く見ないと報告する者がある。(9)

また、各人の生活事態が異なる以上、空想や夢の刺激条件も、人によって異なるであろう。

したがって、客観的には共通の刺激条件を提供し、それへの反応の差異を見るのが望ましい。さらに、筆者の目的からして、余りに専門的で、特殊な方法は、好ましくない。そこで筆者は、TATカードを標準的な測定道具として用いることにした。TATについては、Leary, et al. の原法では、別表のように、ハーバード版 TAT カード10枚を用いている。(1. P. 464)

筆者は、初め(70年代では)、早大版 TAT カード(1956)⁽¹⁰⁾ 10枚、次いで精研版カード(1961)⁽³⁾ 10枚を用いてみたが、いづれも作成年代が古いため、登場人物の服装、ヘアスタイル、その他の生活様式などに、古色蒼然たるものがあり、回答者に異和感を与え、絵の中の登場人物との同一視を困難にする傾向がみられた。

欧米文化へのなじみと、生活様式の洋風化を考えれば、TAT 原版も使用可能ではないか。時代と文化のちがいきそあれ、懐かしの洋画作品を連想させもし、かえって異和感は少ないかもしれない。そこで、1980年代後半以降は、ハーバード版 TAT 原版カード(1943)⁽²⁾ 10枚を用いることにした。

Leary, et al. と筆者の使用したカードの異同は、Table 3 の通りである。

Leary, et al. の使用した TAT カードとは、10枚中4枚を変更した。

Table 3 TATカード一覧

Leary, et al.		筆 者	
男子用	女子用	男子用	女子用
No.1	1	1	1
2	2	3 BM	3 GF
3 BM	3 GF	4	4
4	4	6 BM	6 GF
6 BM	6 BM	7 BM	7 GF
6 GF	6 GF	9 BM	9 GF
7 BM	7 GF	10	10
12M	12M	13MF	13MF
13MF	13MF	16	16
18BM	18GF	18BM	18GF

a) カードNo.2(農場で働く人々をバックにした女性像)を、Leary, et al. は、家族との関係を見るために用いているが、このカードは、たとえ懐かしの洋画作品のシーンとみるにしても、余りにも時代離れした情景で異和感が強いので、筆者は使用しない。

b) 原法では、男子用の6BM(母親的人物と息子的人物のシーン)と、女子用の6GF(父親的人物と娘的人物のシーン)

の2枚を、男女双方に共通に用いているが、これは不可解である。そこで、TATの原法通りに、男子には6BMを、女子には6GFのみを用いることにした。その代わりに、同性の友人または、きょうだい関係を見るために、男子用には9BM、女子用には9GFを追加した。

c) 異性間の愛情関係を見るために、No.10(男女の抱擁シーン)を追加した。

d) 原法では、12M(いわゆる催眠カード)を男女双方に用いているが、これは非日常的な特異なシーンであるのでカットし、その代わりに、刺激カードに制約されない、自由な空想を促すために、No.16(ブランクカード)を追加した。

ただし、実際に使用した経験からいえば、TAT 原版にも問題はあつた。画面が全体に暗いことである。そのため、空想ストーリーの内容への影響もあり得る。もう少し明るい画面を増やすか、モダンアートの抽象画か、象徴的な画面のカードにするなど、改善の余地を残している。

② TAT 施行法

a) 刺激提示

TAT は、原則として個別的に用いられるが、筆者の場合は、集団的に施行している。当初は、スライドプロジェクターで、カードを一枚宛、スクリーンに映写したが、暗室を要する不

便があった。OHP の登場以来は、OHP でスクリーンに映写し、ストーリーは、所定の記録用紙に記述を求める方式にしている。

b) 教示

(1) “これから何枚かの絵を見ていただく。それぞれについて、自由に空想して下さい。これは、どんなに空想力が豊かであるか、空想力の検査です。一枚毎に、絵の中の人物について、好きなように空想ストーリーを作して下さい。シナリオライターになったつもりで、大いに想像力を発揮して下さい”。

(2) 集団的に施行する場合は、次の4点について、箇条書きで、記述を求める。

○これは、どんなシーンか。

○主人公と脇役は、だれか。

○お互いの感情と行為を、くわしく記すこと。

○その後（先）は、どうなるか（結末、将来）。

(3) あらすじでよいこと、一枚につき10分以内にまとめること。

(4) ストーリーは、一枚毎に独立したものでよいこと。

(5) どんなストーリーでも、正しいとか誤りとかいうことはないこと。全く自由に、好きなストーリーを作ること。

(6) 登場人物が一名しかない場合（No.1）は、他の登場人物を、自由に想定すること。最後の一枚（No.16：ブランク）についても、好きなように登場人物を想定して、ストーリーを作ること。

(7) 所要時間は、100分少々であること。

③ TAT ストーリーの評定

a) 対人的テーマの評定法

Leary, et al. は、TAT ストーリーの対人的テーマ（動機）の評定に、巨視的評定と微視的評定の二つの方法を用いているが、微視的評定が基本的である。

巨視的評定とは、ストーリー全体を見渡して、主人公とわき役（他者）の間の基本的関係について、全体的に評定するものである。

例えば、主人公（娘） $\frac{F}{H} \Rightarrow D$ 他者（母）の場合、“この主人公は、思いやりのない母親を恨み、退却する”と評定する。

微視的評定とは、ストーリー中の人物の対人行動（感情と行為）を、主人公のテーマとわき役のテーマに分け、それぞれを、16の対人的変数のアルファベットのコード文字により、逐一に評定する方法をいう。

例えば、主人公が“怖がっている”とすれば、《H》，“怒っている”とすれば、《E》と評定する。筆者は、この微視的方法を用いている。量的データを必要とするからである。この評定には、「レベルⅢ用対人行動分類表」^(付表3)を利用する。この分類表は、Leary, et al. の場合は、極めて簡略であるので、(1, Pp. 170-171), 筆者が補充して作成したものである。

b) 採点法

10コの TAT ストーリーについて、主人公とわき役に与えられたテーマの評定を、別々に集計する。主人公のテーマの集計が《象徴的自己：Ⅲ-H》のデータ、わき役（他者）に与えられたテーマの集計が《象徴的他者：Ⅲ-O》のデータとなる。その結果は、レベルⅢ自己（Ⅲ-H）

と他者(Ⅲ-O)のグラフで、別々に図示される(Fig. 3, Fig. 4)。

c) 診断図へのプロットについては、次章(Ⅳ)を参照されたい。

2 レベルⅣ(表現されないもの)の測定法

① レベルⅣのデータ

人格の最深のレベルは、《表現されないもののレベル》と呼ばれる。上の四つのレベル(I, II, III-H, III-O)で、一貫して、有意にオミットされている対人的テーマから成るとされている。(1, P. 192) 行為や意識的報告は勿論のこと、空想や夢にさえ表現されない対人的動機のことである。

普通には、表現されたものを、その人のすべてだと思いやすい。しかし、ものごとには、必ず隠れた半面がある。光あるところには、必ず影がある。表現されたものの影には、必ず表現されないものがある。表現されないもののレベルとは、人格の影の部分に相当する。

レベルⅣの規定に当り、Leary, et al. は、二つの基準を設けている。一つは消極的基準：上の四つのレベルで、一貫して表現をオミットされているテーマであること：有意な《オMISSION(省略)》。今一つは積極的基準：積極的に回避されているテーマであること：有意な《回避》である。(1, P. 192)

② レベルⅣの測定法

a) 有意な《オMISSION》の測定は、容易である。一つには、上の四つのレベル(I-S, II-S, III-H, III-O)のデータを比較して、一貫して表現を省略されている行動を発見することである。グラフの空白の部分、または、ICLで、《否定》された項目をみることである。

今一つには、もっと簡便な数学的方法がある。(1, Pp. 153-159) 後者によれば、レベルⅣを、単一の《要約点》(7, Pp. 50-51)によって、診断図上に示すことが可能である。

この《省略》得点の算出には、表現されているものの《要約得点》(7, Pp. 50-51)の平均を計算し、これを全体(100)から引けばよい。これを診断図にプロットすれば、DE オクタントに入る。すなわち、この人は、《穏やかなサディズムの感情》を、一貫してオミットしていることになる。これが、人格の影の部分に相当する(Fig. 5)。

b) 有意な《回避》の測定法としては、Leary, et al. は、統計的方法と実験的方法(抑圧のテスト、知覚防衛の測定など)を挙げているが、これらは、未まだ試案的であるし、一般的でもない。

本来、表現されていないものを、直接に測定することは困難である。間接的な測定によらざるをえない。そこで、筆者は、レベルⅣについては、消極的基準による《表現されないもの》の簡便な推定法として、数学的な方法による有意な《オMISSION》の測定を用いている。これは、簡略化と平易化という、筆者の対人的診断法改訂の目的に適するからである。

なを、診断用語については、次報を参照されたい。

Table 4 省略得点の計算法

表現されているもの		表現されていないもの
Dom	Lov	
I-S : 56	78	Dom=100-49=51
II-S : 44	59	Lov=100-59=41
III-H : 40	41	
III-O : 55	58	Ⅳ : サディズムの感情
T : 195		
	195/4	236/4
$\bar{x} \doteq 49$	59	Dom 垂直軸の値 Lov 水平軸の値

IV 結果の要約法の改訂

1 ICL の評定結果の要約

① 個人内比較(1)：オクタント得点と《グラフ》

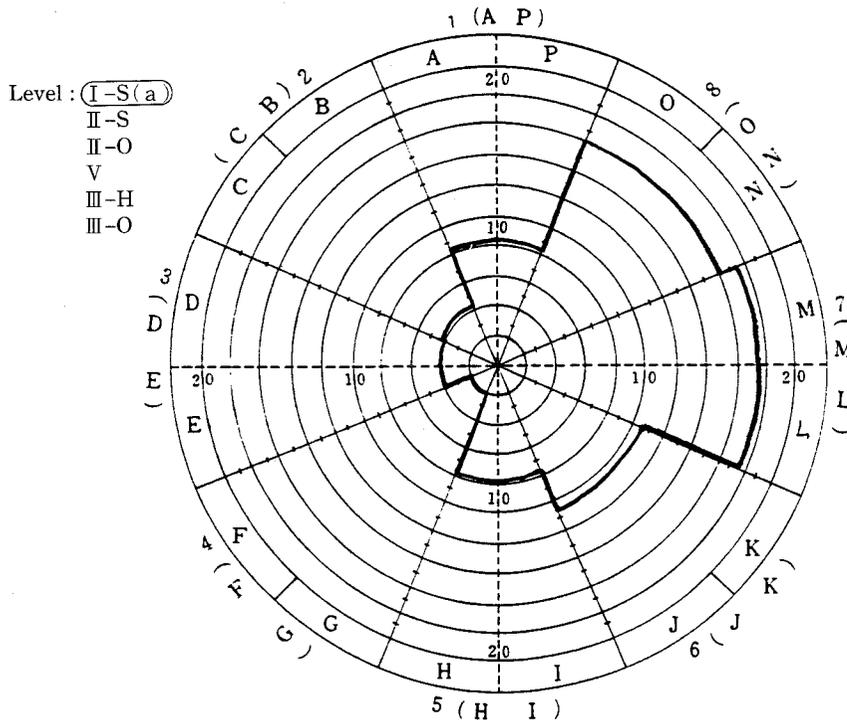
原法では、個人内比較と個人間比較の双方を用いているが、筆者は、個人内比較に徹した要約を用いている。

それぞれの個人の反応レポーターの特殊性をみるには、個人間の比較よりも、《個人内比較》が必要である。粗点をそのまま円形連続体に移して、《グラフ》にすれば、16種の対人行動の相対的比重をみることができる。実際には、各人の対人行動の要約には、AP、BC、……NOの如く、互いに隣接するもの同志を二つ宛合わせて、八つの《オクタント得点》に集約し、これを《グラフ》に図示する(Fig. 1, 2)。このグラフは、特定のレベルにおける個人の対人行動のレポーターの一覧表を意味する。Fig. 1, 2は、K嬢のI-S(公共的自己)と、II-S(意識的自己)の要約である。

② 個人内比較(2)：要約得点と《診断図》

筆者の場合、ICL評定票によるデータの種類の、最低6種(I-S, II-S, II-S', II-O, II-S(O), V)ある。もし他者のデータを2名分とすれば、グラフの数は10枚にもなり、総合的理解が困難になる。

そこで、対人関係のパターンの診断のためには、オクタント得点を、さらに《要約得点》に



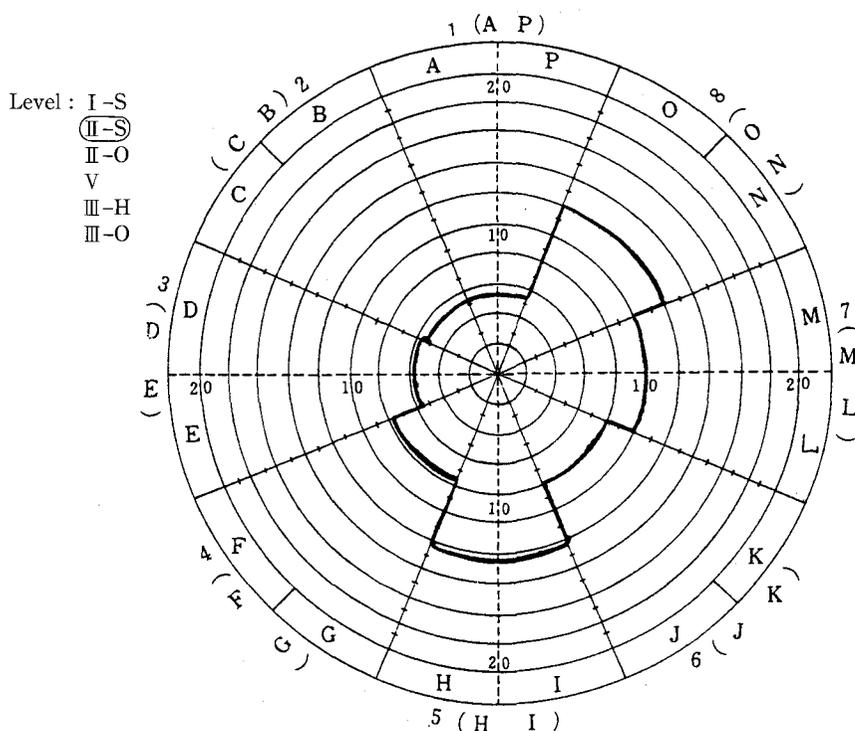


Fig. 2 II-Sのグラフ

変換し、円内の一点で表わすのが便利である。八つのオクタント得点を合成し、ベクトルを計算し、垂直軸の値 (Dom) と水平軸の値 (Lov) に要約する。要約得点の範囲は、+48.0~-48.0にわたる。

これを、さらに標準得点に換算し、《診断図》にプロットすれば、円内の一点に要約して表わすことができる。これを《要約点》という。要約点は、力の作用点を意味する。円の中心からの方向は、対人行動のパターンの種類を、中心からの距離は、その程度を表わす。診断図上の位置によって、八つの診断カテゴリーのいずれかに、自動的に分類される (Fig. 5)。

なを、ベクトルの計算式は、先報の如く、次の公式 (改訂版) による。⁽⁷⁾

$$\text{Dom} = \text{AP} - \text{HI} + .7 (\text{NO} + \text{BC} - \text{FG} - \text{JK}),$$

$$\text{Lov} = \text{LM} - \text{DE} + .7 (\text{NO} + \text{JK} - \text{BC} - \text{FG}),$$

但し、AP = オクタント AP の値、以下同様、Sin45° の値を0.7とする。

2 TAT データの要約

レベルⅢ用 TAT ストーリーの評定結果についても、ICL の評定結果と同様、ストーリー全体の評定結果の集計を、オクタント得点に集約した後、主人公 (Ⅲ-H)、他者 (Ⅲ-O) の別に、《グラフ》に図示する。Fig. 3, 4 は、K嬢のⅢ-H、Ⅲ-Oの要約である。

さらに、それぞれを、垂直、水平の《要約得点》に集約し、これを S. S. に換算して《診断図》にプロットし、《要約点》を決定する。Fig. 5 は、K嬢のデータによる診断図である。

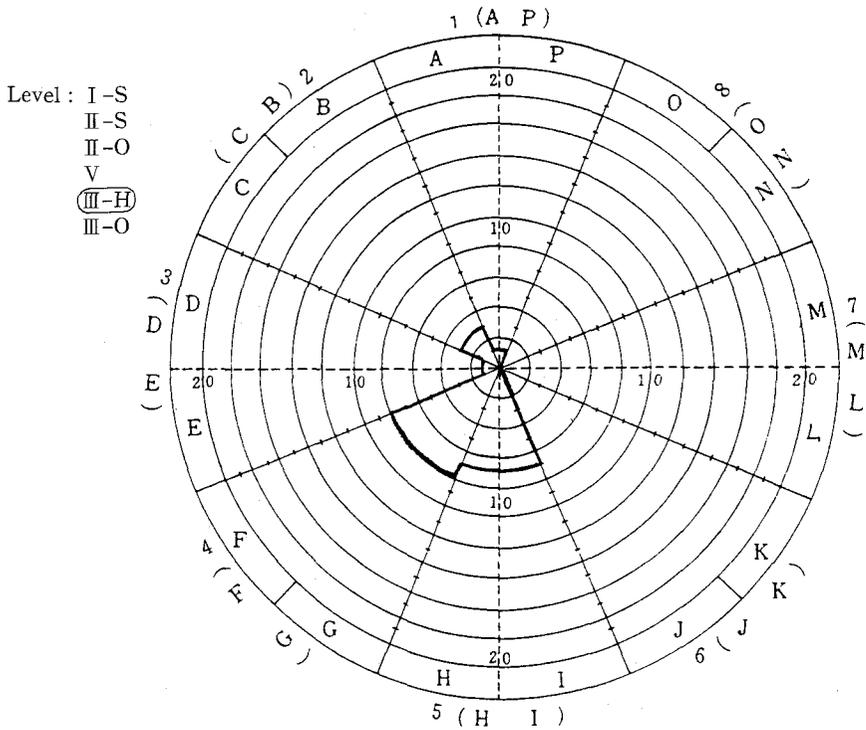


Fig. 3 III-Hのグラフ

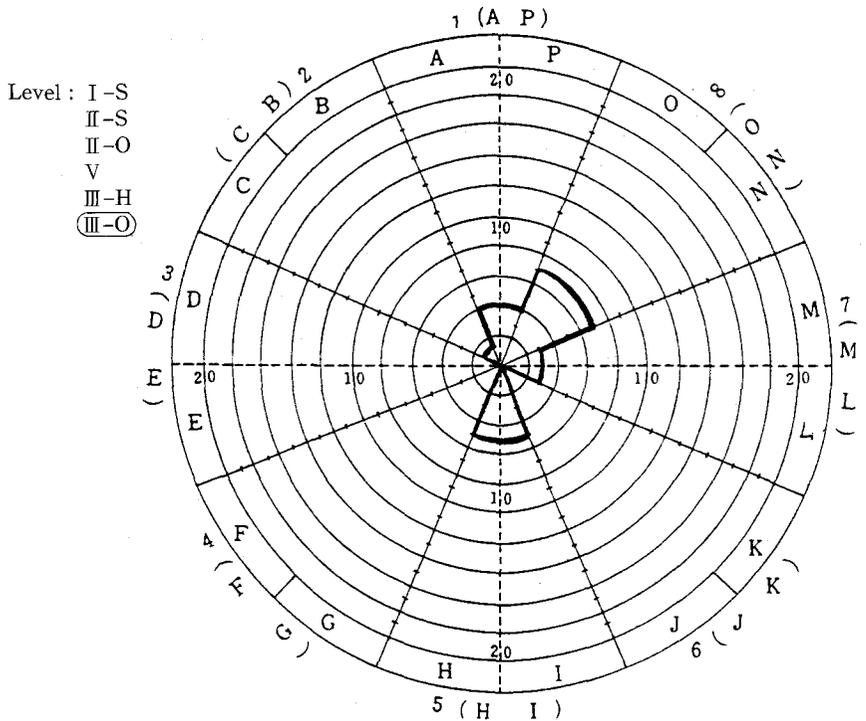


Fig. 4 III-Oのグラフ

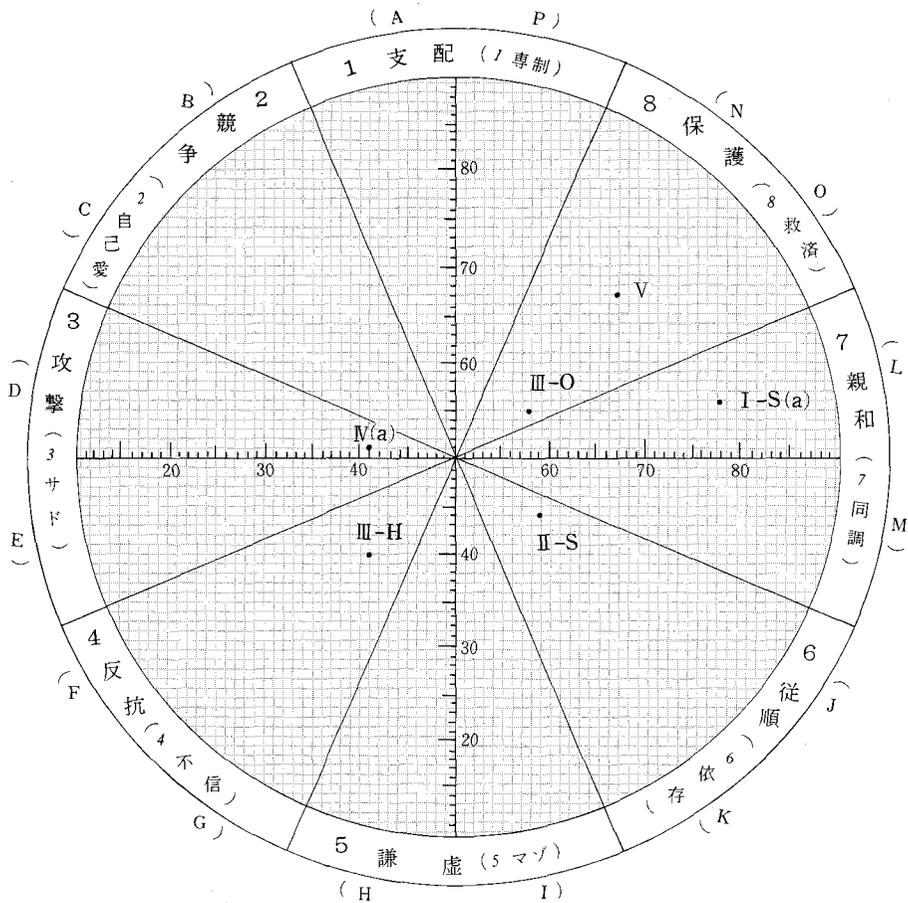


Fig. 5 診断図

ただし、筆者は、他者を2～3名にしているが、他者が複数の場合は、その人数別に、診断図を別にした方が判りやすい。

3 新換算表の作成 (1988)

① 規範的アプローチのディメリット

Leary, et al. の、ベクトルの計算による対人行動要約の方法は、確かに効果的な方法である。16コの得点、または8コのオクタント得点は、円内の一点に集約されるからである。

ただし、要約点(力の作用点)の決定に当っては、Dom (垂直軸の値)、Lov (水平軸の値)の粗点は、〈集団の平均を基準にした〉標準得点に換算して、診断格子(筆者の診断図)にプロットすることになっている。

この、集団の平均を基準にして、各人の相対的位置を決定するという、いわゆる規範的(normative)アプローチの不合理性については、先報で指摘した通りである。(7, Pp. 54-55) その結果、規範的アプローチを去って、個性記述的(idiographic)アプローチに徹すること、それ

が筆者の課題となった。長い闇が続いた。そしてある日、忽然として一条の光が射した。それは、粗点の〈0〉を中心とした、新しい換算表である。1988年のことである(付表4)。

筆者の診断図では、円の中心は、粗点の〈0〉に相当する。ただし、普通の標準得点とは異なるので、便宜的に〈S. S.〉と表示している。

② 個性記述的アプローチのメリット

Leary, et al. の原法では、(1)規範的アプローチのため、各レベル、各データ毎に“基準(norm)”が異なり、別々の換算表を必要とすること、(2)したがって、すべてのデータの直接比較が困難であること、(3)“基準”は、時代や文化、年齢、性別に応じて変動する可能性があり、頻繁な改訂や何種類もの基準の設定を必要とすること、などのデメリットがある。

それに対して、筆者の改訂版(粗点の〈0〉を基準にした換算表)は、(1)すべてのデータを、同一基準の共通の換算表で扱うことができること、(2)したがって、すべてのデータの直接比較が可能であること、(3)時代や文化、年齢、性別等の差異を超えて、適用可能であること、などのメリットを有する。

③ 要 約

以上のように、筆者の新しい換算表は、各レベル、各種のデータのすべてに、使用可能である。

その結果、人格のすべてのレベルの対人行動の測定に、同一変数を用いるのみではなく、すべてのレベルのデータに、同一換算表を用いることが可能になり、診断図へのプロットが簡便になった。

また、すべてのデータを共通の“基準”で扱えることから、すべてのデータの直接比較が可能となり、総合的診断が容易になった。筆者の目指した簡略化、平易化に近づいたといえよう。

文 献

1. Leary, T. (ed) Interpersonal diagnosis of personality, Ronald Pr., N. Y., 1957.
2. Murray, H. A. et al. Thematic Apperception Test, Harvard Univ. Pr., Cambridge, 1943.
3. 佐野勝男・横田仁 精研式 TAT: 主題構成検査図版(成人用), 金子書房, 1961.
4. 戸芻正人 対人関係の研究(1) — ICL 性格評定票の作成 —, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部, 第23巻, 41-56, 1977.
5. 戸芻正人 対人関係の研究(2) — 人格の対人的次元について —, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部, 第36巻, 1-10, 1990.
6. 戸芻正人 人格の対人的診断法の研究(3) — 人格のレベル(多層性)について —, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部, 第37巻, 33-45, 1991.
7. 戸芻正人 人格の対人的診断法の研究(4) — 人格の対人的変数について —, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部, 第37巻, 47-58, 1991.
8. 戸芻正人 人格の対人的診断法の研究(6) — 人格の多層的診断法について —, 愛媛大学教育学部紀要, 第I部, 第38巻, 第2号, 39-56, 1992.
9. 戸芻正人 防衛行動の研究(2) — 夢の再生と夢の顕在内容 —, 愛媛大学紀要, 第V部, 第12巻, 43-54, 1965.
10. 戸川行男他編 TAT 日本版: 絵画統覚検査図版, 金子書房, 1956.

付表 1

ICL 評 定 票 (F-6)

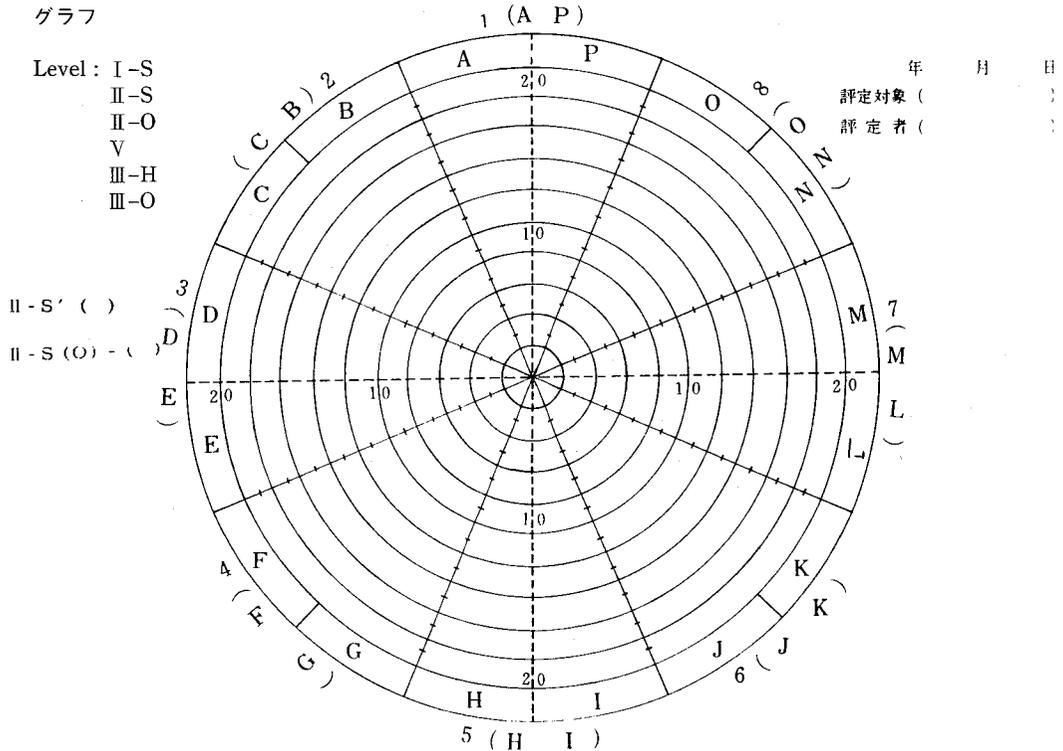
1 考え深い	33 有能である	65 威厳がある	97 誰からも賞讃されたがる
2 人に指図 <small>さしず</small> ができる	34 よくリーダーになる	66 ボス的である	98 独裁的である
3 自尊心がある	35 自分を主張する	67 プライドが高い	99 高慢である
4 自分のことは自分でできる	36 人のことには無関心	68 競争心が強い	100 人を道具に利用する
5 必要な時には厳格になれる	37 厳しいが公正である	69 口やかましい	101 残酷である
6 人を批判できる	38 気が短い	70 ずけずけ言う	102 無慈悲である
7 正当な不平は言える	39 陰気である (暗い)	71 ふきげんである	103 反抗的である
8 無闇 <small>むやみ</small> に人を信じない	40 心が傷つきやすい	72 しつと深い	104 人を信じない(信じられない)
9 自分を反省できる	41 弁解しやすい	73 自分を責めやすい	105 いつも自分をはずかしく思う
10 人に服従できる	42 人に譲歩しやすい	74 引っ込み思案	106 意気地がない
11 人を尊敬できる	43 よく人に助けてもらう	75 いつも人を頼りにする	107 人にすぎる
12 人を信頼できる	44 忠告によく従う	76 自己決定ができない	108 見境 <small>まじか</small> なく人を信じる
13 人と協調できる	45 愛想 <small>あいそ</small> がよい	77 人に同調しやすい	109 だれにでもよい顔をする
14 人と仲よくできる	46 気持ち暖かい	78 社交的である	110 だれにでも好意を持つ
15 思いやりがある	47 優しい	79 情にもろい	111 過度に情深い
16 人の援助 (世話) ができる	48 世話好き	80 気前がいい	112 人の世話をやきすぎる
17 野心が強い	49 いつも人に教えたがる	81 頼りにされる	113 優れている(人に尊敬される)
18 支配欲が強い	50 人を自分の思いどりに動かす	82 積極的である	114 勢力がある
19 うねばれている	51 自信が強い	83 大胆 <small>たいだん</small> である	115 独立心がある
20 自己中心的である	52 打算的である	84 ドライである	116 人に冷淡である
21 手ぎびしい	53 手前勝手 <small>てまへがたり</small> で公正でない	85 断固 <small>だんこ</small> としているが公平である	117 秩序を重んじる
22 攻撃 <small>こうげき</small> 的である	54 口が悪い	86 人を責めやすい	118 批評好きである
23 不平が多い	55 憎み <small>うらみ</small> をもちやすい	87 人からの干渉 <small>せしず</small> (指図) をきらう	119 うちとけない
24 いつまでも根に持つ	56 強情 <small>ごうじやう</small> である	88 失望することが多い	120 むやみに感動しない
25 はずかしがりである	57 こわがりである	89 まごつきやすい	121 自信がない
26 気が弱い	58 人の言いなりに従う	90 おとなしい	122 控え目である
27 強い者を崇拜する	59 めったに反抗しない	91 忠実である	123 感謝の心がある
28 素直 <small>すなわ</small> である	60 だまされやすい	92 人を疑わない	124 よく人に相談する
29 人に影響されやすい	61 妥協しやすい	93 楽天的である	125 快活である
30 開放的である	62 人の好ききらいをしない	94 理解がある	126 人と親しみやすい
31 親切すぎる	63 人をかばいすぎる	95 親切である	127 同情心に富む
32 献身的 <small>けんしん</small> に人につくす	64 寛大すぎる (甘い)	96 包容力がある	128 寛容 (人を赦 <small>ゆる</small> せる)

付表 2.

ICL 評定票 回答用紙 (F-6 1990)

番号	回答欄					小計						小計	合計	Level:
1	17	33	49			65	81	97	113			P	I-S, II-S, II-O, V	
2	18	34	50			66	82	98	114			A	II-S' (),	
3	19	35	51			67	83	99	115			B	II-S (O) - ()	
4	20	36	52			68	84	100	116			C	記入の仕方	
5	21	37	53			69	85	101	117			D	○……そう	
6	22	38	54			70	86	102	118			E	×……ちがう	
7	23	39	55			71	87	103	119			F	○……わからない	
8	24	40	56			72	88	104	120			G		
9	25	41	57			73	89	105	121			H	III-H, III-O	
10	26	42	58			74	90	106	122			I	年 月 日	
11	27	43	59			75	91	107	123			J		
12	28	44	60			76	92	108	124			K	評定対象	
13	29	45	61			77	93	109	125			L	() 男・女	
14	30	46	62			78	94	110	126			M	判定者	
15	31	47	63			79	95	111	127			O	() 男・女	
16	32	48	64			80	96	112	128			P	関係	
	S1	S3	S2	S3		S3	S2	S4	S2					()
		A P	B C	D E		F G	H I	J K	L M		N O			() () () () () () () () () ()
		合計½ () () () () () () () () () () () () () ()												

グラフ



付表3 「Level-III 象徴的水準（夢、空想）での対人行動の分類：対人的テーマ」

A：〈力〉のテーマ	：指導性 指示 命令 権力 監督 指揮 威圧 弾圧 政治家 管理職（指導者）
B：〈ナージズム〉のテーマ	：独立性 自己顕示 優越感 自信 誇り 自己主張
C：〈搾取〉のテーマ	：拒否 人を利用する 利己心 競争心 誘惑 強奪 レイプ 強盗 独占欲
D：〈処罰的敵意〉のテーマ	：非難 処罰 強制 残忍な行為 脅迫
E：〈純粋な敵意〉のテーマ （攻撃）	：怒り 不和 斗争 殺人 嫌悪 いじめ
F：〈反抗〉のテーマ	：消極的抵抗（不服従・不一致）反抗 規則違反 反体制 離反 裏切り 不平 めいてい 非行 犯罪 さすらい 断絶 孤独 離婚
G：〈不信〉のテーマ	：不信 不満 嫉妬 失望 拒否される 悪いことがおきる 疎外感 誤解 被害妄想
H：〈マゾヒズム〉のテーマ	：悲しみ 恐怖 不安 驚き 孤独感 引込思案 逃げる（引下がる） 罪悪感 罰を受ける 反省する 自己懲罰 自殺 発狂 謝罪する 悔い改める
I：〈弱さ〉のテーマ	：服従 屈服 無知 迷い 内心の矛盾葛藤 無能 消極的な受動性 疾病 劣等感 悩み 当惑 被害を受ける
J：〈従順〉のテーマ	：忠告に従う 教えを求める 積極的な受動性 崇拜 尊敬 敬服する 信仰
K：〈信頼〉のテーマ	：依存 すがる 人を頼りにする よいことがやってくる 幸運 世話をされる 感謝の念 甘える 救われる 助かる 歓喜 ハッピーエンディング
L：〈協調〉のテーマ	：協力 同意 気心が合う 人を受け容れる 集団への一致 団結 慣例への一致 和解する
M：〈純粋な愛〉のテーマ	：親和 友情 恋愛 結婚 Sex
N：〈優しさ〉のテーマ	：支持（同情）する 親切 激励 慰める あわれみ
O：〈寛容〉のテーマ	：援助 救済 世話をする 与える 許す 弁護する
P：〈優越〉のテーマ （成功）	：英雄 偉業 スター 有名 成功（達成） 優越 知患者 教える 専門家 オーソリティ アイドル

「Level-I 行動的水準（行為）での対人行動の分類：対人反射の測定用」

A〈支配〉	指導する	命令する	ボスになる （威圧する）	P〈優越〉 （成功）	教える	助言する	尊敬を求める
B〈独立〉	独立する	自慢する	みせびからず	C〈競争〉	競争する	拒否する	搾取する（奪う）
D〈処罰〉	懲罰する	嘲笑する	脅迫する	E〈敵対〉	嫌悪する	攻撃する （非難）	憎悪する
F〈反抗〉	不平を言う	従わない	反抗する	G〈不信〉	用心する	信用しない （疑う）	曲解する
H〈謙虚〉 （反省）	自己批判する	弁解する	卑下する	I〈服従〉	服従する	屈服する	意気地無し の行為
J〈従順〉	尊敬する	教えをもとめる	崇拜する	K〈信頼〉	信頼する	助けを求める	すがる
L〈協力〉	協力する	一致する	同意する	M〈親和〉	仲良くする	ほめる	是認する （肯定）
N〈優しさ〉	同情する	慰める	あわれむ	O〈保護〉	許す	保護する	援助する （与える）

付表 4

要約得点換算表(1988)

粗 点		S. S.	粗 点		S. S.
39.1	— 40.0	90	— 0.1	— 1.0	49
38.1	— 39.0	89	— 1.1	— 2.0	48
37.1	— 38.0	88	— 2.1	— 3.0	47
36.1	— 37.0	87	— 3.1	— 4.0	46
35.1	— 36.0	86	— 4.1	— 5.0	45
34.1	— 35.0	85	— 5.1	— 6.0	44
33.1	— 34.0	84	— 6.1	— 7.0	43
32.1	— 33.0	83	— 7.1	— 8.0	42
31.1	— 32.0	82	— 8.1	— 9.0	41
30.1	— 31.0	81	— 9.1	— 10.0	40
29.1	— 30.0	80	— 10.1	— 11.0	39
28.1	— 29.0	79	— 11.1	— 12.0	38
27.1	— 28.0	78	— 12.1	— 13.0	37
26.1	— 27.0	77	— 13.1	— 14.0	36
25.1	— 26.0	76	— 14.1	— 15.0	35
24.1	— 25.0	75	— 15.1	— 16.0	34
23.1	— 24.0	74	— 16.1	— 17.0	33
22.1	— 23.0	73	— 17.1	— 18.0	32
21.1	— 22.0	72	— 18.1	— 19.0	31
20.1	— 21.0	71	— 19.1	— 20.0	30
19.1	— 20.0	70	— 20.1	— 21.0	29
18.1	— 19.0	69	— 21.1	— 22.0	28
17.1	— 18.0	68	— 22.1	— 23.0	27
16.1	— 17.0	67	— 23.1	— 24.0	26
15.1	— 16.0	66	— 24.1	— 25.0	25
14.1	— 15.0	65	— 25.1	— 26.0	24
13.1	— 14.0	64	— 26.1	— 27.0	23
12.1	— 13.0	63	— 27.1	— 28.0	22
11.1	— 12.0	62	— 28.1	— 29.0	21
10.1	— 11.0	61	— 29.1	— 30.0	20
9.1	— 10.0	60	— 30.1	— 31.0	19
8.1	— 9.0	59	— 31.1	— 32.0	18
7.1	— 8.0	58	— 32.1	— 33.0	17
6.1	— 7.0	57	— 33.1	— 34.0	16
5.1	— 6.0	56	— 34.1	— 35.0	15
4.1	— 5.0	55	— 35.1	— 36.0	14
3.1	— 4.0	54	— 36.1	— 37.0	13
2.1	— 3.0	53	— 37.1	— 38.0	12
1.1	— 2.0	52	— 38.1	— 39.0	11
0.1	— 1.0	51	— 39.1	— 40.0	10
0		50			